僕は男と女の生殖器の名稱をかはるがはる怒號して氣合を掛ける。
すると彼等が笑ひ出す。
毎朝僕のうたふ二つの唄があつた。
――お前さんだからじつちな事話す。
ゆふべぬてる間に×××かたぺらぬすまれた。
長い方は此處に書けない種類のとても猥褻な歌だ。
芝から葉書が來た。
友達は皆遠慮してゐますと言ふのだ。
義母は味噌汁やおぢやを朝小使室で、あたゝめてくれるやうになつた。
正月の半ばも何日の間にか過ぎた。
『君の詩集を、ダヽイスト新吉の詩と云ふ題で出す事になつたが構はないか、で僕は本屋から六十圓前借をしたが、月末に君に送金するから』
辻潤の寄こした長い手紙を讀んでも、僕は返事をしたゝめる事も出來ない。